

埋蔵文化財 愛知

No.7



(白線内 1号墓)

朝日遺跡（西春日井郡清洲町～名古屋市西区に位置する）において、全国最大の規模を有する方形周溝墓2基（1号墓及び2号墓）が検出された。両墓とも弥生時代中期に属するもので、1号墓は台状部裾において、東西幅35m、2号墓は同じく東西幅34mである。

両墓のような大型方形周溝墓は、朝日集落における首長クラス存在を窺わせるものである。また、東日本に一般的である溝の四隅の切れるタイプの方形周溝墓のうち、弥生時代中期前葉にあたるものは、同形態のものとしては最古のものであり、東日本に波及する周溝墓の起点となり、同方面の墓制のあり方に多大な影響を及ぼしたものと思われる。

なお1号墓西周溝の最下底から2本の狭鋤^{せまぐわ}が、また、2号墓北周溝の最下底から一木造りの鋤^{すき}3本が、並んで出土しており、造墓との関係が注目される。

（6～7ページに関連記事記載）

シリーズ 朝日遺跡を語る

祭りと道具

朝日遺跡で行われていた「祭り」の具体的な姿は現段階までの事例をもって明らかにすることは困難である。そのため本稿では、一般的に祭祀用具として認識されてきたもの、生産（日常的な生活）以外の目的で制作・使用されたと思われるものを、「祭りの道具」としてとりあげた。

崇拝するもの

銅鐸・石剣・石棒・杖状木製品・卜骨は、呪術的、儀器的道具として用いられたと考えられ、再生産・戦闘・共同体の祭り・祖霊など『生』の領域にあるものの象徴として、崇拝される役割を果たしていたものと思われる。

弥生時代中期に出土する石棒は、それを模したと思われる石棒形木製品や類似した形態をもつ杖状木製品とともに、縄文的要素の強いものであり、弥生時代中期に至ってもなお伝統的な祭祀が残存していたことを示している。また、同期の遺構から焼痕のある鹿の肩甲骨が出土しており、^{ほくせん}卜占の風習があったことも窺われる。

一方、弥生時代になって新たに出現する代表的な祭祀用具として、銅鐸があげられる。朝日遺跡では、近畿式銅鐸の飾耳部のみが、北居住域、南居住域に各1点、いずれも弥生時代後期の包含層中から出土している。さらに、銅鐸を模した銅鐸形土製品も7点（うち実物を見て忠実に模倣したと思われるものが5点）出土しており、集落内に銅鐸に関する何らかの祭祀があったことが推定される。また、銅鐸及び忠実に模倣された土製品は細片で出土しており、「破碎する」という行為が意識的になされた可能性もある。

動物を模すもの

古来、動物は自然界から授かるもの、人間の持たない超人的な力を持つものとして、畏敬の念をもってみられており、それを祭ることにより狩猟後の獲物の再生産や動物を通じて人知の及ばぬ世界と結びつくこと、動物の能力を得ることなどを願ったのではないかと思われる。

朝日遺跡での動物模倣品の大部分は、鳥形木

製品・鳥形土製品・鳥の線刻土器に代表される「鳥」である。「鳥」のモチーフは弥生時代以降古代に至るまで様々な器物に用いられ、葬送儀礼に使われたと考えられている。「鳥」の形に一定の規格はなく、例えば60D区で出土した弥生時代後期のものは板状をなし、61E区で出土した同じく後期のものは立体的で、腹部に孔をあけ、棒状のものを差し込むようになっていいる。また、「鳥」以外のモチーフとしては、60A区で出土した、弥生時代後期の壺口縁部に線刻された、群列する「鹿」があげられる。

穿孔された土器

穿孔土器とは、日常生活において使用していた土器の一部分に孔をあけることにより、実用性を否定した土器とし、非日常的な用途（死者に対する供献など、死の領域で使用用途）に用いられたと考えられるものである。

朝日遺跡では、焼成後に壺の下胴部に意識的に穿孔したものが大部分を占めるが、その他、甕・鉢・高坏などで、同じく焼成後に穿孔されるものがある。穿孔部位としては、下胴部が大半で、上・中胴部、底部、頸部などがある。また過半数のものが方形周溝墓に供献されるが、他に溝や土坑から出土する例もある。一方、焼成前に胴部に、径5cm～12cm程度の孔を穿ち、実用品としての機能を喪失させた土器として、^{まるまどつきどき}円窓付土器がある。器種は圧倒的に中型の壺が多く、台部が付くものもある。出土状態は多様で、一定の規則性はみられない。

葬送に用いられるもの

朝日遺跡では葬送儀礼の全過程を明らかにすることは困難であり、個別の事例からその一端をかるうじて窺うことができるだけである。
 <方形周溝墓周溝の掘削> —610区・61U区の事例（本号P6～P7参照）から、溝底に幾本かの鍬や鋤を並べ置く行為が行われていたことがわかる。これは被葬者に対する供献品とも考えられるが、溝掘削（非日常の出来事）時に使用された後、日常生活に戻して再び使用する

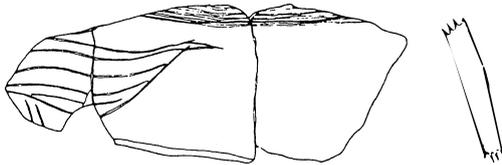
ことを忌避した結果、溝に置かれたとも考えられる。

＜埋葬主体＞ 方形周溝墓の主体部に関しては明瞭なものではなく、幾つかのものにわずかに木棺を使用していたのではないかという痕跡が知られる程度である。人骨が残存していたものは弥生時代中期～後期のもので、6例があり、仰臥屈葬されるもの、仰臥伸展葬で足を交叉するもの、合葬されるものなど、多様である。また、方形周溝墓以外の埋葬方法としては、土塚墓や再墓があるが、方形周溝墓に比べ、その数は、はるかに少ない。さらに人骨が出土した

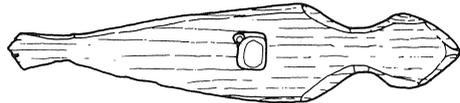
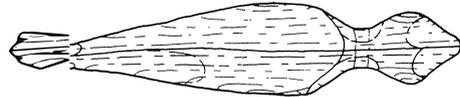
事例として、北居住域にかかわる弥生時代後期の土壘状遺構に伴って、並列して検出された仰臥伸展葬の2例があり、土壘の構築に関係したものかと思われる。

＜壺棺＞ 土塚状の主体部以外のものとして、方形周溝墓のマウンド上に壺棺が置かれるものがある。棺・蓋が別個体のもの、器体の一部が欠損しているもの、穿孔されているもの、完形のものなど、多様性をもつ。また、壺棺の出土状況としては、この他に周溝内や包含層中から検出される例もある。さらに別器種として、甕棺が2例検出されている。

(宮腰健司)

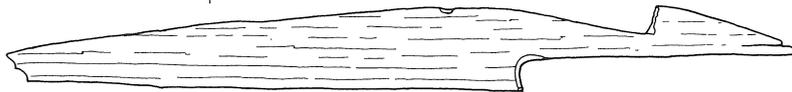


包含層出土 (1 : 3)



60A区 谷C出土 (1 : 1)

61E区 包含層出土 (1 : 2)



60D区 包含層出土 (1 : 4)

朝日遺跡出土の動物をモチーフとした遺物

市町村だより

瑞穂遺跡

——縄文時代の住居跡を検出——
名古屋市教育委員会

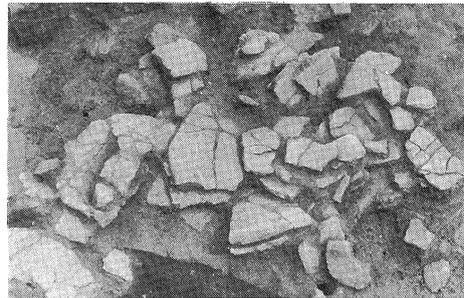
本遺跡は標高約10mの瑞穂台地南端に立地し、50,000㎡にも及ぶ広がりが見込まれている。これまでの調査により、縄文時代～中世にかけての複合遺跡であること、その中心は弥生時代中～後期の集落跡にあることを確認している。

今回の調査は、瑞穂小学校体育館の建て替え工事に伴う事前調査で、推定遺跡範囲の南端920㎡を対象に行った。結果、縄文時代住居跡1軒、弥生時代住居跡3軒、溝11条（その内、集落を巡る環濠と考えられる大溝2条、L字に屈曲し方形周溝墓の可能性をもつ溝1条、多量の貝殻が破棄されていた溝3条がある。）、中世溝1条等を検出した。縄文時代住居跡は、現代の攪乱と弥生時代住居跡により3分の2ほど破壊されているものの、平面プラン円形（推定径

4～5m）の竪穴住居跡であり、石囲炉、壁際の周溝、柱穴数箇所が遺存している。出土した土器から中期末の年代が考えられる。又、弥生時代の遺構では後期の濠2条が注目される。いずれも幅、深さとも4mを越える断面V字形の大規模なもので、5～7mの間隔をもって南北に延びている。

発掘調査による縄文時代中期の住居跡、弥生時代後期の環濠の検出は、今回が初めてのことであり、瑞穂遺跡を考える上で新たな資料が蓄積されたといえよう。

（名古屋市見晴台考古資料館
学芸員 服部哲也）



三河国分寺跡

——伽藍・寺域の確認調査——
豊川市教育委員会

三河国分寺跡は、豊川市の西部、通称八幡台地に位置する。隣接する尼寺跡については既に昭和42年に調査が行われ伽藍配置等が確認されているが、僧寺跡については本格的な確認調査はなされず、推定される塔跡とその礎石2つが遺存するのみであった。

豊川市では、これら国分二寺跡の保存管理計画策定のため、僧寺跡について、昭和60年秋・61年夏の2か年にわたり発掘調査を行っている。調査は、史跡指定地内の16か所にトレンチを設定し665㎡を対象として行った結果、ほぼ史跡境界線に沿う形で東・西・北の三面の築地跡を確認したほか、東回廊及び金堂（又は講堂）と推定される遺構を検出した。

本遺跡は、弥生時代～現代に至る複合遺跡で、

特に中世末の攪乱、改変が激しく国分寺遺構の遺存状況は良好ではないが、東面築地については幅3m強の基壇部及び両サイドの溝状遺構が、また東回廊については、根石・抜き取り穴・雨落ち溝と推定される遺構が検出されている。なお、今年夏の調査で、現国分寺堂前中庭のトレンチより金堂（又は講堂）の基壇南半部が確認され、伽藍中軸線が東3分の1線上付近に寄る可能性が強くなった。

調査は来年度も継続して行う予定であり、今後の調査結果に期待したい。

（社会教育課職員・前田清彦）



発掘ニュース



杉山遺跡 調査区は杉山^{はじょう}端城の西側に位置し、鎌倉時代から戦国時代にかけての遺構と遺物を検出。検出された遺構のうち、特に戦国時代の屋敷地は端城との関連性が高い。遺物は鎌倉時代の山茶碗と戦国時代の碗・皿・内耳鍋など。



勝川遺跡 弥生時代後期の方形周溝墓3基を検出。周溝内から6個体の壺が出土。いずれも完形品。奈良時代～平安時代の溝（勝川廃寺の北大溝とみられる）を検出。幕末から明治にかけての溝・井戸・土坑を検出。



朝日遺跡（A区・B区） 谷地形肩部に沿って東西に伸びる弥生時代後期初頭の溝1条と、これに直交する同期末の溝1条を検出。径約10mの土坑から弥生時代中期末の木製農工具（横槌、鋏、鋤）が出土。弥生時代の集落縁辺部の防御施設並びに方形周溝墓1基を検出。



朝日遺跡（E区・F区） 調査区全域に、北居住域の外縁を走る環濠（弥生時代中期－3条、同後期－2条）が展開。溝内から、鳥形、又鋏などの木製品が出土。方形周溝墓2基を検出。弥生時代後期のやな遺構を検出。



朝日遺跡（M区） 弥生時代中期の方形周溝墓14基を検出。旧河道北岸から弥生時代中期の堰を検出。弥生時代中期（朝日式期）の方形プランを呈する竪穴式住居を8軒検出。



朝日遺跡（R区・S区） 弥生時代中期の方形周溝墓11基検出。うち1基は本紙1頁に記載の大型のもの。他に古墳時代初期の溝1条、および土坑多数を検出。



清洲城下町遺跡（五条川改修関連）（A区・B区） A区は江戸時代の宿場町の北端に位置する。江戸時代のものと思われる溝、土坑などを検出。B区では、幕末期と思われる廃棄土坑から下駄、箸、茶碗、鉢など、の日常生活用の一括遺物が出土。

資料紹介

方形周溝墓周溝内出土遺物の新例

I

朝日遺跡では、これまでに 200基をこえる方形周溝墓が検出され、なお現在も増加の一途を辿っている。このような膨大な数の方形周溝墓の調査によって、弥生時代中期から後期にかけての墓域の展開、墓制の変遷等が大まかに捉えられる状況にいたっている。

今回ここで紹介する事例は、従来の調査ではまったく見ることのなかった新しい事実である。それは、方形周溝墓自体ではなく、方形周溝墓を取り巻く状況を鮮やかに写し出すと思われるものである。

II

昭和61年度は、朝日遺跡にA～Uの21調査区が設定された。このうちO区とT・U区から考古学上問題となる事例を検出した。

<O区> 1号墓は、台状部裾の東西長34m、周溝幅現況8m、周溝深現況2mを測る弥生時代中期前葉の巨大な方形周溝墓で、西溝最下底から狭鋤^{せまくわ}2本が出土した。狭鋤は2本とも柄付きの完形品であった。鋤は溝長軸方向に直交する軸線にそって2mほど離して身を置き、柄は平行させつつ軸線を中心として反対になるように置かれていた。すなわち、2本の鋤はちょうど身を結ぶ軸線の中心点で点対称をなす位置に置かれていたのである。

<T・U区> 2号墓は、台状部裾の東西長35m、周溝幅現況8.5m、周溝深現況1.7mを測る弥生時代中期後葉の巨大な方形周溝墓で、北溝のみ完掘した。この北溝東端最下層から、溝長軸方向に直交して、一木造りの鋤3本が身部先端を南に揃え、並んだ状態で出土した。この他に、同じ層から組み合わせ鋤の身2点、田下駄状木器1点、そしてそれより上層の溝中央寄りからは広鋤^{ひろくわ}末製品2点^{ひらくわ}が出土した。さらに、東に隣接する同時期の3号墓西溝最下層からは、先述したO区1号墓と類似した配置状態で狭鋤2本が出土した。

III

今回出土した木器に共通することは、(1)溝底に接して一定の配置をとっている。(2)土木具である、の2点である。特に狭鋤に関しては、弥生時代中期前葉と中期後葉という、実年代にしておそらく100年以上の隔たりがありながら、時期差を超えた強い共通性が窺えることは注目に値する。

これらの方形周溝墓の周溝最下底から出土した土木具は、その一定の配置状態が見られる点から、溝の開削時に近い時点で溝底に置かれたことはほぼ間違いない。O区1号墓の場合、地山土である青灰色シルト中から出土しており、人為的に土で密閉されたかの観もある。

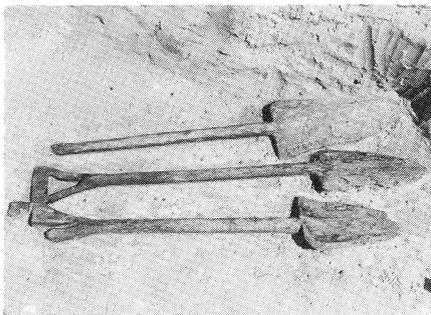
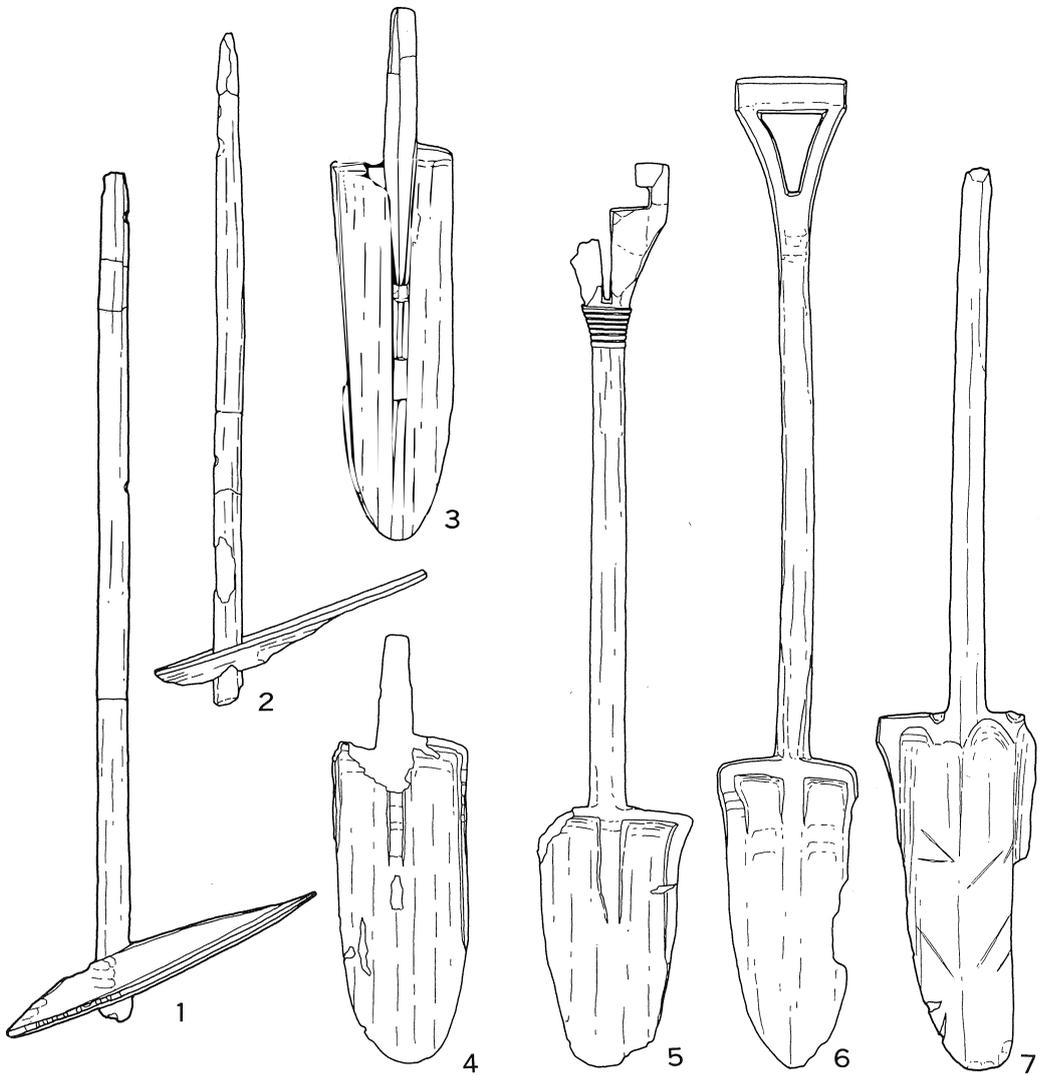
IV

溝底出土の木器がいずれも土木具であることは、それが方形周溝墓築造に使用されたものであることを示している。弥生時代中期前葉のO区1号墓から鋤の出土はなかったが、T・U区2号墓から鋤が出土していることを考慮すると、両者が併用された可能性が高い。すなわち、掘り下げに適する狭鋤、土の移動に適する鋤が効率よく併用されたと考えられる。

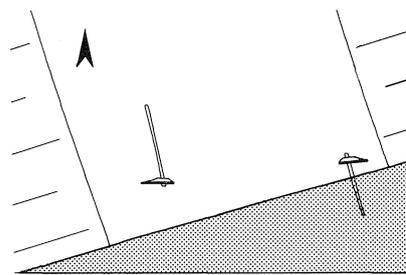
そして溝の開削と台状部の土盛りが終了した段階で、死者の埋葬との時間的先後関係は不明であるが、使用した道具の一部を、一定の方式で据え置いたのである。置き方に時期差を超えた共通性があることは、方形周溝墓築造に際して必ず伴う行為であったことを思わせる。過去の調査例になかったことは、それが木製であるために遺存しにくいということであって、本来はどの方形周溝墓にも伴っていたか、あるいは一定の規模以上の方形周溝墓に伴っていたと考えられる。

方形周溝墓に伴う遺物として、従来から知られている土器類や副葬品の他、今回ここに築造に使用された木器を加えることになった。

(梅村、松田、宮腰、石黒)



2号墓 鋤出土状態



1号墓 鋤出土状態 (1:40)

方形周溝墓内出土の木器 (縮尺 1:8)

(1・2 1号墓、3~7 2号墓)

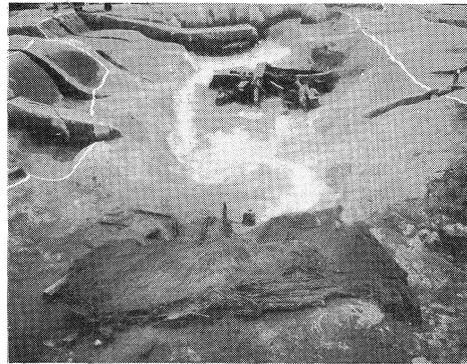
朝日遺跡の『やな』遺構

—— 集落内漁業の一例 ——

本遺跡61E区において、やな（築）遺構が検出された。これは弥生時代の漁業活動を知るうえで貴重な資料である。遺構は本調査区を南北に巡る、北集落に伴う弥生時代後期の環濠のうち、最も内側に位置する環濠で、その溝底に設置されており、保存状態は良好である。

遺構は、幅 3.7m、長さ 2.0mの木枠の上に竹を乗せた構造で、これより北 6 mの所に位置する木組遺構とともに、流れを上る魚を捕獲する機能を有したと思われる。魚は、やな遺構をすり抜けて上り、木組遺構との間で活動範囲を限定されたところを捕獲されたものと思われる。

弥生時代の食糧生産は、稲作の開始により炭



水化物が安定化するのに対し、定住による狩猟の限界が生じ、不足する蛋白質を補う目的で漁業が一層発達した段階と理解されている。朝日遺跡において出土している釣針・ヤス・モリ・漁網錘などの遺物や、今回検出されたやな遺構は、こうした状況をよく示している。

（池本正明）

理事の異動

辞任 11月30日 栗木茂一
就任 12月1日 大溪紀雄
(町村教育長協議会会長)

センターニュース

来訪者

8/5 安城市文化財審議委員会委員長他
8/6 新川町文化財教室 朝日遺跡見学22名
9/4 黄河文明展随展組(中国) 馬忠理氏他2名

記録

8/20~31 豊橋市美術博物館において、埋蔵文化財展を開催。期間中の8月23日



(清洲会場)

に埋蔵文化財講演会を開催。講師は岡山理科大学教授 池田次郎氏。演題「骨からみた日本人の歴史」

9/7~14 清洲町民センターにおいて、埋蔵文化財展を開催。期間中の9月14日に埋蔵文化財講演会を開催。講師は名古屋大学教授 檜崎彰一氏。演題「陶磁器からみた戦国時代」

なお、両会場においての埋蔵文化財展参観者は約 3,800人、講演会への参加者は約 360人であった。

9/25~26 市町村職員発掘調査技術等研修会<専門研修会>を開催。

<現地説明会開催状況>

8/16 杉山遺跡 参加者約120名

9/20 勝川遺跡 参加者約30名

埋蔵文化財愛知 No. 7

発行 昭和61年12月
編集 財愛知県埋蔵文化財センター
〒450 名古屋市中村区名駅二丁目44番5号
名駅パークビル9F
TEL 052-586-3155
印刷 東海プリント